

# トマス・アキナスにおける永劫の問題

---

菅原 領二

## 序

中世哲学において、「永劫 (aevum)」という概念がある<sup>1)</sup>。これは「永遠 (aeternitas)」と「時間 (tempus)」の間に位置する持続の尺度であり、霊的実体や天体を測る尺度である。先行研究において、この概念は1990年以前にはあまり注目されておらず、研究の対象になることも稀であった。しかし、1996年に Porro の研究が現れる<sup>2)</sup>。この研究は永劫概念の成立の歴史を示しつつ、中世哲学全体における永劫概念の見取り図を描くものであった。この Porro の研究以降、永劫概念は研究対象として注目を集めることとなり、永劫研究は単なるパラフレーズにとどまらず、踏み込んで解釈する傾向を持つようになる。Cross の研究<sup>3)</sup>や、Fox の単著<sup>4)</sup>、Porro の編纂した論文集<sup>5)</sup>がこの種の研究と言えるであろう。以上が中世哲学全体の永劫研究の動向である。

そうした動向の中で、トマスの永劫概念はどのように評価されてきたか。大要は次の通り。上述の諸研究は13世紀の永劫理解が二つの立場に区分されることを示していた。すなわち、一方は永劫を時間のように

---

1) 以下で引用、参照したトマスのテキストは基本的にレオ版に依拠したが、『能力論』、『命題集注解』については前者はマリエッティ版に、後者はマンドネ版に依拠した。なおラテン語の綴りについては慣用のものに改めたところがある。

2) Cf. P. Porro, *Forme e modelli di durata nel pensiero medievale*, Leuven University Press, 1996.

3) Cf. R. Cross, "Angelic Time and Motion: Bonaventure to Duns Scotus", T. Hoffmann (ed.), *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, Brill, 2012.

4) Cf. R. Fox, *Time and Eternity in Mid-Thirteenth-Century Thought*, Oxford University Press, 2006.

5) Cf. P. Porro (ed.), *The Medieval Concept of Time*, Brill, 2001.

より先とより後を持つと理解する立場（永劫延長主義）であり，他方はより先とより後を持たないと理解する立場（永劫非延長主義）である。トマスの永劫は後者の永劫非延長主義者の内に位置付けられてきた。しかし，それらの諸研究ではトマスの永劫概念における統一的な見解の不在が主張されてきた。言い換えれば，トマスの永劫は非延長的理解に属するが，それ以上の永劫の規定に関してトマス自身の一貫した見解の存在は疑われてきた。例えば，Fox はトマスの永劫の時期的な変遷を主張し<sup>6)</sup>，Porro は「よく区別された二つのモデル」の存在を主張していた<sup>7)</sup>。この種の解釈の結果，トマスの永劫と永遠の区別は「重要な点において甚だしく曖昧である<sup>8)</sup>」という否定的な評価を受けることになる。

以上のような諸研究とは異なり，本研究が目標とするのはトマスの永劫概念の統一的な理解の提示である。たしかにトマスは永劫を論じる際に，テキストごとに異なる主張をしているように見える。しかし，これらの主張は対立しているのではなく，永劫に関するトマスの見解の部分にすぎない。そして，深層においてトマスの永劫概念は統一的なものであり，これを踏まえるのであれば，トマスの永劫に対して先の否定的評価を下すことには留保の余地がある。これが本研究の主張である。

論述は以下のように進む。まずは各テキストごとの永劫に関する特徴付けを確認する。Porro のトマスの永劫に関するモデル区分<sup>9)</sup>に即して，第一章では第一のモデルに対応するテキスト（『命題集注解』，『任意討論集』）を検討し，第二章では第二のモデルに対応するテキスト（『神学大全』）を検討しよう。この作業により，一見するとトマスの永劫に関する規定にテキストごとのズレがあることが見出されるだろう。第三章においては表面的な規定の違いの背後にある一貫した理論が主張されるとともに，永劫に関する包括的な定義の案出が試みられることになる。

6) Cf. Fox (2006), pp. 271-272.

7) Cf. Porro (1996), pp. 113-114.

8) Cf. Fox (2006), p. 272.

9) この Porro の二つのモデルとは、『命題集注解』や『任意討論集』におけるモデル，もう一つは『神学大全』で描かれるモデルである。

## 1. 第一のモデル

まず第一のモデルに対応するテキストにおける永劫の規定を確認しよう。ここでは『命題集注解』と『任意討論集』の記述が検討される。

### 1.1 『命題集注解』における永劫

『命題集注解』第二巻第二区分第一問題第一項主文では、永遠と永劫、時間の違いが次のように述べられる。

ゆえに次のことが言われるべきである。時間はより先とより後を持つ尺度であり、他方で永劫はそれらを持たない尺度である。理由は以下の通り。尺度の性格は測られるものから受け取るものでなければならない。さて、永劫で測られるところの天使の存在は、変転を欠く不可分なものである。ゆえに、永劫はより先とより後を持たない。ところで、時間によって測られる運動はある種の継起によって完成される。ゆえに時間においてはより先とより後が見出される。さて、永劫は永遠から異なるのであるが、これは次の二つの点で天使の存在が神の存在から異なるようにである。第一に、〔天使の存在と神の存在が異なるのは〕神の存在は存在するところのものであるから、神の存在は自体的に存立しており、他方で天使においては存在と存在するところのものが別々であるからである。第二に、〔天使の存在と神の存在が異なるのは〕天使の存在は他のものによるが、神の存在はそうではないからである。ここから、天使の存在が神の存在のある種の分有であるのと同様に、永劫も永遠のある種の分有であることは明らかである……<sup>10)</sup>。(括弧内引用者補足)

この箇所では、尺度の性格は測られるものから受け取られるという前提のもと、各々の尺度が区別され、その性格が規定されている。永劫によって測られる天使の存在は変転を欠く不可分なものであるため、永劫はより先とより後を持たない。他方で、時間によって測られる運動は継

---

10) *In II Sent.*, d. 2, q. 1, a. 1, co.

起によって完成されるため、時間はより先とより後を持つ。この点で永劫と時間は区別される。そして、永遠と永劫は天使の存在と神の存在が異なるのと同様の仕方で区別される。それによれば、神の存在はそれ自身で存立するのに対して、天使の存在はそうではない。そして、神の存在は別のものに由来しないが、天使の存在は由来する。このような存在論的な規定に基づいて、永劫が「永遠のある種の分有」であると言われている。

注目すべきは永劫と永遠の区別の際にトマスが依拠している議論である。それは、いわば存在の自立性や、存在と存在するところのものとの同一性に関わる議論であった。『命題集注解』においては永劫と永遠を区別するためにこの種の存在のあり方や現実態に依拠する議論が散見される<sup>11)</sup>。先行研究において永劫に関する統一的な見解の有無が論じられる時、問題となるのは永遠との関係で永劫を捉えた際の規定である。時間との関係においては、それ自身でより先とより後を持たないという永劫の規定はトマスのテキストにおいて一貫している。反対に永遠との関係に関しては、以下に示すように永劫の規定に諸テキスト間での相違が見出される。

## 1.2 『任意討論集』における永劫

ついで『任意討論集』における永劫の規定を確認しよう。『第十任意討論』第二問題第一項第四異論回答においては次のように永遠と永劫の違いが主張される。

第四のものに対しては次のように言われるべきである。永遠と永劫の間には三つの違いが指定されうる。その内の一つは上述のことから取られうる。実際に、永遠が永遠的なものの実体そのものを測るのは、その実体が実在界において (in rerum natura) 存在することに即して、すなわちそれに対して帰される全てのものとともである。他方で既に述べられたように、永劫はそうではない。他の違いは次のことに基づいて取られる。永遠は自体的に存立する存在を

---

11) Cf. *In I Sent.*, d. 8, q. 2, a. 2, co.; *In I Sent.*, d. 19, q. 2, a. 1, ad 5.

測る。ゆえに永遠は永遠的なものの実体と同一である。他方で永劫は創造された存在を測るが、その存在は自体的に存立するものではない、なぜならその存在は創造された有の実体と異なるからである。第三の違いは次のことに基づいて取られうる。永劫は終わりの側から制限不可能であるが、しかし始まりの側からはそうではなく、他方で永遠は両方の側から制限不可能である<sup>12)</sup>。

ここでは永遠と永劫に関する三つの違いが措定されている。この第一の違いに関しては主文で述べられていたことが関連している<sup>13)</sup>。そこでは事物について語る仕方が二種類あると述べられていた。すなわち、事物が実在界においてあることに即して語る仕方と事物が我々の考察においてあることに即して語る仕方である。第一の仕方によれば、実体はその状態 (dispositio) と作用とともに受け取られる。この場合には、同時に全体である持続は神にのみ適合する。なぜならば、神のみが、本質のみならず本質に関係する事柄全てに関して不可変であるからである。反対に、第二の仕方によれば作用や状態が切り離され、実体のみが受け取られる。永劫は第二の語り方においてのみ天使に適合する。第四異論回答においては、このような主文の内容に基づいて、永遠は実体とそれに関わる全てのものを測るが、他方永劫は実体のみを測ると述べられている。

第二の違いは測られるものの違いである。すなわち、自らによって存立するものを永遠は測り、そうではないものを永劫は測る。第三の違いは「始まり」と「終わり」に関するものである。すなわち、永劫は終わりを持つことができず、始まりを持つ<sup>14)</sup>。

12) *Quodlibet X*, q. 2, a. 1, ad 4.

13) Cf. *Quodlibet X*, q. 2, a. 1, co.

14) この『任意討論集』のテキストにおいて、永劫は終わりの側から制限不可能である (sit interminabilis ex parte finis) とされるのに対して、『神学大全』においてトマスは永劫が終わりを持つ可能性を認めている (ST, 1, q. 10, a. 5, co.)。本稿はこの二つの矛盾するように思える記述を次のように整合的に解釈する。小山田が指摘するように、永続的な被造物はその本性に関しては不可滅的であるが、存在と本質の複合物として見られれば無に帰されうる。Cf. 小山田圭一, 「神は自らを無に帰することができるか」, 『中世哲学研究』, 第三十三号, 2014年, pp. 61-64. よって、永劫によって測られる被造物の本性にのみ注目するのであれば、永劫は制限不可能であるが、存在と本質の複合物として見られるのであれば、

ここで永遠と永劫について述べられていることと、『命題集注解』で述べられたことには共通点と相違点がある。共通するのは、第二の違いである。この仕方による永劫と永遠の区別は『命題集注解』においても確認されていた。そして『任意討論集』では永遠が永遠的な実体と同一であると述べられていることから、永劫は永劫的な実体とは異なるということも導出されるだろう。すなわち、測られる事物と尺度との非同一性である。他方で、『命題集注解』の記述と異なるのは第一の違いと第三の違いである。これらは『命題集注解』においては強調されてはいなかった。このようにテキストを『命題集注解』と『任意討論集』に限定したとしても、永劫と永遠の区別に関する規定に何らかの差異があることが認められる。

## 2. 第二のモデル

ついで、Porro により第一のモデルとは異なると解釈され、Fox により『命題集注解』とのアプローチの違いが強調された『神学大全』第一部第十問題第五項主文の永劫に関する記述を確認しよう。

ゆえに次のことが言われるべきである。すなわち、永遠は恒存する存在の尺度であるため、あるものが存在することの恒存性から離れる限りで、それは永遠から離れる。さて、ある種のものはそれらの存在が転変の基体であるまたは転変において存する限りで存在することの恒存性から離れ、この種のものは、すべての運動とさらにはすべての可滅的なものどもの存在のように時間によって測られる。他方である種のものはそれらの存在が転変においては存せず、転変の基体でもないため、存在することの恒存性からあまり離れないが、しかし現実態または可能態において、結び付けられた転変を持つ。このことは諸天体において明らかであり、それらの実体的存在は非転变的であるが、しかし諸天体が非転变的な存在を持つのは場所に即しての転変性ととともにである。同様に諸天使についても次のこと

---

永劫は終わりを持ちうる。『任意討論集』においては前者の観点で永劫が考察されており、『神学大全』においては後者の観点で永劫が考察されていると本稿は解釈する。

は明らかである。それらはそれらの本性に属する限りでの選択に即した転変性とそして自らの仕方による、諸々の知性認識と感情と場所の転変性ととも非転变的な存在を持つ。そしてゆえに、この種のものは永遠と時間の間にあるところの永劫によって測られる。他方で永遠が測るところの存在は可變的でもなく、可變性に結び付けられてもいない。ゆえにこのように、時間はより先とより後を持ち、他方で永劫は自らの内により先とより後を持たないが、しかしそれに対してより先とより後が結び付けられることができ、他方で永遠はより先とより後を持たず、より先とより後と両立することもない<sup>15)</sup>。

ここでは永遠が恒存的な存在を測ると前提された上で、存在が恒存的な存在から離れるに応じてそれに対応する尺度は永遠から離れ、永遠からの距離によって各々の尺度の性格が規定されている。さて、ある種のものはその存在が転変においてなく、転変の基体でもないため、存在することの恒存性から離れてはいない。しかし、この種のものは結び付けられた転変を持ちうる。天体ならば場所に関する転変であり、天使ならば選択や知性認識に関する転変である。ゆえにこの種のものの存在は非転变的であるが、作用に関して転変性を持っている。このため、この種のものを測る永劫はその内により先とより後を持っていないが、それに対してより先とより後が結び付けられうる<sup>16)</sup>。

このように『神学大全』の永劫の規定は、より先とより後が結び付けられうる、というものである。これは異論回答でも強調されており、「永劫は同時に全体的であるが、永遠ではない、というのもそれはより先とより後と両立するからである<sup>17)</sup>」と述べられている。そして『能力論』第三問題第十四項第九異論回答においても、「永劫に継起が結び付けられる……反対に永遠は継起を含まず、継起と結び付けられない<sup>18)</sup>」

15) ST, I, q. 10, a. 5, co.

16) ただし、天使が持っている働き等に関してはより先とより後があるという意味で「時間」によって測られるものの、この種の時間は「離散的な数( Numerus discretus )」であると言われ、非連続的である。Cf. *In II Sent.*, d. 2, q. 1, a. 1, ad 4. 「離散的時間」の歴史的成立とその哲学的問題に関しては、Porro(1996), pp. 267-383 を参照。

17) ST, I, q. 10, a. 5, ad 2.

と言われる。この種の永劫の規定は『命題集注解』や『任意討論集』においては見られなかったものであり、このことがトマスの永劫概念の一貫性を否定する根拠となっている。

### 3. トマスにおける永劫概念の統一的理解とその包括的定義

以上ではトマスの永劫に関する諸規定が主に永遠との区別の文脈においてテキストごとに異なっていることが確認された。ここでは諸規定の相違がトマスの永劫概念についてそれが時期的に変遷した (Fox), または二つのモデルがある (Porro) ことを意味せず, それらが統一的に理解できることを示すとともに, 永劫の包括的な定義を試みる。

#### 3.1 永劫の諸規定

さて, 既に確認された永劫の規定を以下に列挙してみよう。

- a. それ自身においてより先とより後を持たない (『命題集注解』, 『神学大全』)
- b. 測られるものの存在の非自存性<sup>18)</sup>, そこから帰結する尺度と測られる実体の非同一性 (『命題集注解』, 『任意討論集』における第二の違い)
- c. 作用等から切り離して対象を測る (『任意討論集』における第一の違い)
- d. 始まりを持つが, 終わりは持ちえない (『任意討論集』における第三の違い)
- e. より先とより後が結び付けられうる (『神学大全』, 『能力論』)

これらの諸規定について注釈を加えておこう。まず, 複数のテキストにおいて共通に見出されるのは a である。時間と永劫が異なることを主張する際にトマスはこの規定に依拠する。反対に, 永遠との違いを説明する際にトマスが依拠する永劫の規定は安定していない。そして d のタイプの規定はトマスにとって本質的ではないと思われる。理由は次の

18) *De Potentia*, q. 3, a. 14, ad 9.

19) この定式化は次の三つの意味を含む。すなわち, (1)天使の存在がそれ自身で存立するもの (per se stans) ではなく他のものによるもの (ab alio) であること(2)天使の存在と本質が同一ではないこと(3)天使の存在が(存在とは区別された本質等の)他のものによって受け取られていること, この三つを含意している。



通り。

トマスは永劫を規定する際に主に次の二つの立場を批判する<sup>20)</sup>。一方は永劫がより先とより後を持つが、時間とは異なり「新しくなること (innovatio)」と「古くなること (veteratio)」を持たないとする立場であり、現代の研究者によって永劫延長主義へと整理される立場<sup>21)</sup>である。他方は尺度を「始まり」と「終わり」を実際に持つかどうかによって規定し、永劫を「終わり」を持たないが、「始まり」を持つと理解する立場である。前者に対するトマスの批判は、持続におけるより先とより後は、「新しくなること」と「古くなること」から切り離されないため、この規定は不可能というものである。後者に対する批判は、現実的に「始まり」と「終わり」を持つかどうかによって依拠する尺度の捉え方は本質的ではないというものである。すなわち、もし神が天使の存在を永遠から存在するようにしたのであれば、永劫は永遠と同じように「始まり」も「終わり」も持たないことになるが、それでも依然として永劫は永遠と区別されるためこの定義は認められない、というようにトマスはこの立場を批判する。*d*の規定もまた、永劫が現実的に「始まり」を持つことを意味するため、後者の立場に整理されるだろう<sup>22)</sup>。よって、この規定はトマスの永劫概念に対して本質的ではないと解釈できる。ただし、なるほど現実的に「始まり」と「終わり」を持つかどうかは非本質的だが、これらを持ちうるということ<sup>23)</sup>、すなわち「始まり」と「終わり」を持つ可能性は、後述する *e* と同様に本質的である。なぜならば、この可能性そのものが永遠と永劫との区別の指標となるからである。

### 3.2 尺度の決定基準

以上のようなそれぞれ異なる永劫の規定に対して統一的な解釈をおこなうため、トマス自身が尺度の性質をどのように決定しているのかを確認しよう。トマスは『命題集注解』において次のように語っていた。

20) トマスの他の立場に対する批判としては *In I Sent.*, d. 19, q. 2, a. 1, co.; *In II Sent.*, d. 2, q. 1, a. 1, co.; *ST*, 1, q. 10, a. 5, co. を参照。

21) Cf. Fox (2006), pp. 255–273; Cross (2012).

22) この『任意討論集』の規定の本稿の解釈と、この規定が永劫は「終わり」を持ちうることに矛盾しないことに関しては注 14 を見よ。

23) このことはトマス自身も認めている。Cf. *ST*, 1, q. 10, a. 5, co.

したがって、各々の事物に対して固有の尺度が対応するのであるから、その尺度の本質的な違いは測られる現実態の条件に即して受け取られなければならない<sup>24)</sup>。

このテキストにおいては、永遠や永劫等の尺度の違いが測られるものの現実態の条件から受け取られると述べられている。ここから、違いのみならず尺度そのものの性格もまた、測られるものの現実態のあり方に応じて決定されると解釈できるだろう。このことを踏まえるのであれば、先に示された諸規定は全てこの永劫によって測られる現実態としての存在のあり方に基づいて導出されるように思われる<sup>25)</sup>。

まず、*a* に関してトマス自身が「さて、永劫で測られるところの天使の存在は、変転を欠く不可分なものである。ゆえに、永劫はより先とより後を持たない<sup>26)</sup>」と述べている。ゆえに、この規定は天使の存在が変化せず、より先とより後の分割を受け入れないことから導かれるだろう。

*b* に関しては永劫的な被造物は存在と同一ではないということから導出されるだろう。トマスは全ての被造物が存在と同一ではないことを認めていた<sup>27)</sup>。したがって、永劫的被造物の存在の現実態はそれを持つものとは区別され、自存するものではない。そして現実態を指し示す永劫もまた、それを持っている事物と区別されることになる。

*c* に関しては次のように導出される。トマスは全ての被造物において、その存在と作用 (*actio*) が別々のものであることを認めている<sup>28)</sup>。よって、永劫が存在の現実態を測るものである以上、その射程は存在にしか及ばず、作用を測るには至らない。そのため、永劫は作用を切り離して対象を測る。

*e* に関しては次のように導出される。天使の存在の現実態は天使を基体として、作用と共に成立しうる。このことは第二章において引用され

24) *In I Sent.*, d. 19, q. 2, a. 1, co.

25) 以下では主に天使の現実態のあり方を参照して、永劫の諸規定を導出することを試みるが、先の『神学大全』のテキストから明らかなように天体もまた永劫によって測られるものであり、天体の現実態に基づいて永劫の規定を導出することも可能である。

26) *In II Sent.*, d. 2, q. 1, a. 1, co.

27) Cf. *Quodlibet II*, q. 2, a. 1, co.; *S. C. G.*, 2, c. 52; *ST*, 1, q. 50, a. 2, ad 3.

28) Cf. *ST*, 1, q. 54, a. 2, co.

た『神学大全』の記述から明らかだろう。さて、この天使の作用はより先とより後を持つ「時間」によって測られるのであった。したがって、天使はそれが存在と継起的な作用を持つということに着目するのであれば、永劫と時間という二つの尺度によって測られることになる。ここから、永劫はそれによって測られるものを基体として、より先とより後と両立することが導かれるだろう。

以上から、トマスが永劫の規定として各々のテキストにおいて述べていることは、トマスの体系における永続的存在の現実態の性格に由来する諸々の永劫の規定の内的一部分でしかないと考えられるだろう。このような解釈は次の含意を持っている。すなわちトマスは永遠と永劫の違いが問題になる各々のテキストにおいて、永劫に関する規定全てを列挙しているのではなく、文脈に応じて永劫が持つ一部の規定をあげているにすぎない。そして、永劫が測られる事物の現実態の性格に基づいて規定されているということに着目すれば、この意味においてトマスの永劫のモデルは一つである。したがって、Porro や Fox の解釈のように、永劫概念の「二つのモデル」や時期的な変遷を主張する必要はなく、曖昧さをもって否定的な評価を与えることに留保の余地があると言えるだろう。

### 3.3 トマスにおける永劫の定義

先に述べたように、我々の解釈によればトマスは直接的に永劫の性格全体を語ってはいないことになる。それではトマスの永劫の全貌はどのようなものだろうか。最後に以上の成果を踏まえて、トマスの体系における永劫を十分な仕方で定義することを試みよう<sup>29)</sup>。

さて、トマスはボエーティウス由来の永遠の定義の適切さを議論する際に、その永遠の定義が否定的なものであると解釈している<sup>30)</sup>。これは我々の知性が第一に複合体を捉えるからであり、単純なものを認識するためには、複合的なものを出発点として、その複合を除去することで進

---

29) なお Suarez-Nani はその著書においてストラスブールのニコラにおいて永劫の「定義」がなされていたことを報告している。Cf. T. Suarez-Nani, *Tempo ed essere nell'autunno del medioevo*, B. R. Grüner Publishing, 1989, p. 52.

30) Cf. *In I Sent.*, d. 8, q. 2, a. 1, ad 1; *ST*, 1, q. 10, a. 1, ad 1.

まなければならぬからである。さて、神は単純なものである。よって、永遠の定義は神に関する事柄を直接表現しているのではなく、時間に固有な性質を否定することで表現している。

永劫の定義も同様のものでなければならぬ。というのも、天使もまた質料と形相から成る複合体ではないという意味で、単純なものだからである<sup>31)</sup>。よって、永劫の定義もまた時間に固有な事柄を排除する否定的定義でなければならぬ。トマス自身、「永劫はあたかも霊的実体によって分有された永遠のようである<sup>32)</sup>」と述べていることから、永劫の定義の案出を永遠の定義の形式に与る仕方で試みよう。永遠の定義は「制限不可能な生の同時に全体的で完全な所有 (*interminabilis vitae tota simul et perfecta possessio*)」であった。

トマスはこの永遠の定義を否定的定義として事物に対する三つの制限を排除するものと解釈する<sup>33)</sup>。三つの制限とは次の通り。(1)持続の全体に即する制限、それによれば始まりと終わりを持つものが制限されると言われる。(2)持続の諸部分の性格による制限、それによればその任意の部分が先行するものと後続するものに分けられるものが制限されると言われる。(3)そこにおいて存在が受け取られるところの基体の性格による制限、それによれば存在が何らかのものにおいて受け取られることで制限されると言われる。

永遠の定義は次のようにこの三つの制限を排除する。「制限不可能な生の (*interminabilis vitae*)」とは第一の制限を排除し、「同時に全体的で (*tota simul*)」とは第二の制限を排除する。そして第三の制限を排除するため「完全な (*perfecta*)」が置かれる。この第三の制限の排除によって、「永遠的な存在が、霊的被造物のような分有された存在を持つ不可動な諸被造物の存在から区別される<sup>34)</sup>」。そしてここで用いられている「生 (*vita*)」は「生きること (*vivere*)」のみを示しているのではなく、作用一般を示すものとして解釈できるだろう<sup>35)</sup>。

31) Cf. *ST*, 1, q. 50, a. 2, co.

32) *Quodlibet V*, q. 4, a. 1, co.

33) Cf. *In I Sent.*, d. 8, q. 2, a. 1, co.

34) *In I Sent.*, d. 8, q. 2, a. 1, co.

35) Cf. *ST*, 1, q. 10, a. 1, ad 2.

これをもとに永劫の定義を案出することを試みよう。まず、「同時に全体的で」という第二の制限の排除は天使の存在が不可変であり、その内により先とより後を持たないことから採用されるべきである。そして「完全な」に関しては天使の存在が天使の実体と同一ではなく、基体に受け取られることで限定されるものである以上、否定されなければならない。そして「制限不可能な生」の採用の可否を検討するにあたって、「制限不可能な」と「生」を分割しよう。「制限不可能な」に関しては、天使の存在は神の存在とは異なり、始まりと終わりを持つことも、どちらも持たないこともできるため<sup>36)</sup>、本質的な定義になることができない。しかし、重要なのは天使の存在が神の存在とは異なり、それらを持つことができるということである。この可能性を反映するために、「制限不可能な (interminabilis)」は「制限可能な (terminabilis)」へと書き換えることとする。ついで「生」に関しては、先に述べたように神とは異なって、天使において存在と作用は区別される。さて、永劫は天使の「存在」を測るのであった。したがって、「生」は永劫の定義において採用されることはできず、「存在」へと書き換えられなければならないだろう<sup>37)</sup>。

さらに次のことにも注目しよう。先に見たように、『神学大全』においてトマスは永遠と永劫の区別に関して、*e*に依拠していた。この規定は永劫により先とより後が結び付けられうるというものであり、言い換えれば、永劫が継起と両立可能であることを示していた。よって、この可能性も定義に反映しなければならない<sup>38)</sup>。これを「より先とより後と

---

36) 天使の存在が「始まり」を持つことに関しては、永遠からではなしに創造されることにより、「終わり」を持つことに関しては、神によって無に帰されることによる。トマスは永続的被造物がこれら二つを持ちうることを認めている。Cf. *ST*, 1, q. 10, a. 5, co. 天使の不可滅的な本性との両立に関しては注 14 を参照。

37) ただし、「存在」へと書き換えるということは検討の余地がある。というのも、トマスは「霊的実体はただそれらの実体に関してのみならず、それらの固有の作用に関しても永劫によって測られる」(*Quodlibet V*, q. 4, a. 1, co.) と述べるからである。この永劫と作用の問題に関してはさらなる究明が必要ではあるが、ここから少なくともトマスは天使の何らかの作用は永劫によって測られると考えているように思われる。ゆえに、永劫の定義を拡張し、何らかの作用を測るという点から「生」を限定し、維持することは可能な選択肢の一つと言えるだろう。

38) この「可能性」の反映に関しては小山田圭一氏（東京工業大学）の指摘による。

結び付けられうる」と表現し、先の定義に付け足すこととしよう。以下で案出された永劫と永遠の定義を並列して示す。

#### 永劫の定義

より先とより後が結び付けられうる<sup>39)</sup>制限可能<sup>40)</sup>な存在の同時に全体的で不完全な所有<sup>41)</sup>。

*coniungibilis cum priore et posteriore terminabilis essendi tota simul et imperfecta possessio.*

#### 永遠の定義

制限不可能な生の同時に全体的で完全な所有。

*interminabilis vitae tota simul et perfecta possessio.*

### 結 論

以上で我々はトマスの永劫概念を検討した。各々のテキストにおいて永遠から永劫を区別する際、その説明に表面的な差異が見出される。先行する諸研究はこの差異から永劫に関する複数のモデルの存在 (Porro) や、トマスの永劫理解の時期的変化 (Fox) を主張していたように思われる。このような研究動向に反して、本研究は永劫を統一的に理解できることを示した。次のようにである。永劫が測る対象は天使等の永続的被造物の存在である。そして尺度の性格は測られる対象に基づいて定められる。したがって、永劫には測られる永続的被造物の存在のあり方が反映される。これを踏まえるならば、トマスのテキストにおい

39) この語句が修飾するのは、「所有」である。

40) すでに述べたように「始まり」と「終わり」を現実的に持つかどうかは永劫にとって非本質的である。しかし、それらを持ちうるという可能性は永遠から永劫を区別するという点で重要であり、これを反映するために *terminabilis* を定義の中を含める必要がある。

41) 「所有 (*possessio*)」という言葉を採用するかどうかは未だ検討の余地がある。トマスは次のように解釈する。すなわち、この言葉は我々が何かあるものを「平穏で (*quiete*)」、「十分な仕方で (*plene*)」持つ場合に使われることから、ボエーティウスは神の平穏な存在を意味するために用いているとしている。天使の存在はそれが天使と同一でない限りにおいて、平穏な存在とは言えないのかもしれないが、形容詞「不完全な (*imperfecta*)」が「所有」を修飾していることから、このような「平穏」のニュアンスは否定されるとみなし、書き換えないこととする。Cf. *In I Sent.*, d. 8, q. 2, a. 1, ad 6; *ST*, 1, q. 10, a. 1, ad 6.

て見られた永劫の異なる規定の各々は、永劫によって測られる対象から全て導出され、それらは永劫が持つ性格の諸部分であり、対立する永劫概念を構成しているわけではないことが導かれる。すなわち、永劫に関する諸規定は、永劫という尺度の性格が永続的被造物の存在のあり方に基づいて全て導出されるため、この点で統一的な解釈を受け入れる。

したがって、トマスは永劫に関する複数のモデルを持っていた、あるいは永劫概念には時期的な変遷があるという解釈と、ここから帰結するトマスの永劫の否定的な評価には留保の余地があると言えるであろう。さらにボエーティウスの永遠の定義に対するトマスの解釈を参照しつつ、永劫の包括的な定義の案出が試みられた。それによれば永劫は「より先とより後が結び付けられうる、制限可能な存在の同時に全体的で不完全な所有」と定義される。これによって各々のテキストにおいて断片的にしか語られることがなかったトマスの永劫概念の全体が示されたと言えるであろう。

最後に永劫概念を研究することの意義について言及しておきたい。このことは永遠を定義することの意義から導出されることができよう。永遠の定義はそれが否定的な仕方であるにせよ、それによって我々が直接的には認識することができない神に関する事柄を認識可能にするものである。永劫に関しても同様に、我々は永劫によって、直接的には認識不可能である天使等の存在のあり方を認識することができる。したがって、永劫概念を研究することは、永劫によって測られる被造物のあり方を究明することであり、この点で哲学的意義が認められるであろう。